遠野物語

口語訳 遠野物語

柳田國男

監修●後藤総一郎
口語訳●佐藤誠輔
挿画●笹村栄一

河出書房新社

著　　者　柳田国男（やなぎたくにお）

1875年（明治8年）、兵庫県に生まれる。東京帝国大学卒業後、農商務省に勤務、貴族院書記官長をへて朝日新聞社に入社、勤務のかたわら全国各地を訪れ、民俗調査を重ねた。その研究は柳田民俗学とも呼ばれ日本民俗学の祖とされる。1962年没。「海上の道」「遠野物語」などその著作は現在、『柳田国男全集』（ちくま文庫、全32巻）として刊行されている。

監 修 者　後藤総一郎（ごとうそういちろう）

1933年、長野県生まれ。明治大学大学院博士課程修了。現在、明治大学教授。著書『柳田国男論』など。

訳　　者　佐藤誠輔（さとうせいゆう）

1928年、岩手県遠野生まれ。旧制遠野中学校卒業。遠野の小学校教諭、教頭、校長を歴任。現在、日本国語教師の会顧問。

〔挿　画〕　笹村栄一（ささむらえいいち）

1931年、遠野生まれ。遠野高校卒業。版画家。

〔本文注〕　小田富英（おだとみひで）

1949年、東京生まれ。東京学芸大学卒業。現在、武蔵野市立第三小学校教諭、柳田国男研究会会員。

〔口語訳〕

とおの　ものがたり

遠野物語

1992年7月10日　　初版発行
1993年6月10日　　3版発行

発行所　株式会社河出書房新社

発行者　清水　勝

東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2

電話　営業(03)3404-1201　　編集(03)3404-8611
振替口座(東京)0-10802

装　幀　渋川育由

印刷所　暁印刷株式会社

製本所　加藤製本株式会社

定価はカバー・帯に表示してあります。落丁・乱丁本はお取替えいたします。
©1992 Printed in Japan　ISBN4-309-00767-8

目次

「口語訳」出版にあたって　後藤総一郎　5

初版序文　7

1 遠野郷のなりたち　17
2 遠野三山　18
3 山女の黒髪　20
4 笹原の山女　22
5 笛吹峠の山人　24
6 さらわれた娘（青笹村）　25
7 さらわれた娘（上郷村）　27
8 寒戸の婆　30
9 大谷地の怪　33
10 妹のシルマシ　35
11 かわいそうな母親　36
12 乙爺の話　40
13 赤毛布の乙爺　41
14 大同のオクナイサマ　42
15 オクナイサマの田植　44
16 コンセサマとオコマサマ　46
17 ザシキワラシ　47
18 孫左衛門のザシキワラシ　49
19 草分長者の没落　51
20 蛇の前兆　53
21 孫左衛門の稲荷　54
22 丸い炭取　55
23 老女のまぼろし　58
24 大同のいわれ　59
25 吉例の門松　60

26 田圃のうち 61
27 池端の石臼 62
28 大坊主と石餅 65
29 前薬師の天狗 67
30 山男の草履 69
31 人さらい 70
32 千晩ヶ嶽 71
33 白望山の不思議 73
34 離森の山女 75
35 白望の山女 76
36 御犬の経立 77
37 駄賃付をおそう狼 78
38 誇り高い御犬 80
39 御犬の見張 82
40 身をかくす狼 83
41 山を去る狼 84
42 「鉄」と狼 85
43 「熊」と熊 87
44 猿の経立（笛を好む） 89
45 猿の経立（女を好む） 91
46 鹿笛と猿の経立 92
47 六角牛の経立 93
48 仙人峠の猿 94
49 仙人堂 95
50 かっこ花 96
51 オット鳥 97
52 馬追鳥 99
53 郭公と時鳥 101
54 閉伊川の機織淵 103
55 河童の子 105
56 かくされた河童 108
57 河童の足跡 110

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

58 姥子淵の河童 111
59 遠野の赤河童 114
60 いたずら狐 115
61 白い鹿 117
62 赤い衣の天狗 119
63 マヨイガ（三浦家の話） 121
64 マヨイガ（山崎の話） 124
65 安倍ヶ城 127
66 安倍屋敷 128
67 貞任高原 129
68 二つの館跡 130
69 オシラサマの始まり 132
70 オクナイサマとオシラサマ 135
71 隠し念仏 136
72 子ども好きのカクラサマ 137
73 カクラサマの木像 139
74 カクラサマの始まり 140
75 長者屋敷の山女 141
76 長者屋敷の黄金 142
77 雨落の男 143
78 雪合羽を着た魂 145
79 雲壁のまぼろし 147
80 田尻家 149
81 雲壁の男 152
82 座敷の人影 153
83 大洞万之丞の家 154
84 耶蘇教伝来 155
85 白子 156
86 堂突する魂 157
87 寺参りする魂（遠野町） 159
88 寺参りする魂（土淵村） 160
89 愛宕山の山の神 161

90 天狗森 162
91 鳥御前と山の神 164
92 早池峰の山男 166
93 予言された菊蔵 167
94 菊蔵と狐の相撲 169
95 不思議な庭石 171
96 火事のシルマシ 173
97 生き返った松之丞 174
98 石塔 176
99 魂の行方 177
100 四十八坂の狐 179
101 豊間根の狐 181
102 山の神と小正月 183
103 雪女 185
104 小正月の月見 187
105 世中見の餅 188
106 山田の蜃気楼 189
107 「山の神」の子 190
108 山の神乗り移る 191
109 雨風祭 193
110 ゴンゲサマ 195
111 ダンノハナと蓮台野 197
112 蓮台野とホウリョウの土器 198
113 ジョウヅカ森 200
114 山口のダンノハナ 201
115 おとぎばなし 202
116 ヤマハハ 203
117 ヤマハハとオリコヒメ 208
118 紅皿欠皿 211
119 遠野郷獅子踊（歌詞） 212
注 220
訳者あとがき 223

「口語訳」出版にあたって

後藤総一郎

日本民俗学の父と呼ばれる柳田国男の『遠野物語』は、いまから八十年前の一九一〇（明治四十三）年に出版された、日本民俗学の誕生を告げる記念碑的な本であります。

それゆえに、柳田国男といえば『遠野物語』といわれるように、柳田国男そして日本民俗学のまさに代名詞のように『遠野物語』は受けとめられているといっても決して過言ではないでしょう。

それは、三島由紀夫をはじめとする多くの識者によって評価され指摘されてきた、「文学」としての香り高い作品であることに由来しましょう。そのことは、柳田国男自身も、晩年、「あれはわたしの唯一の文学といってもいいでしょう」と語っているなかによく示されているといえましょう。

その文学作品としての秘密は、文語体で書かれた「簡潔さの無類のお手本」（三島由紀夫）としての文章に、「金石に鐫（ほ）りつけるように、するどく、かたく、ほそい文体」（谷川健一）にあったのです。

ところが、そのために今日では、一般の読者に『遠野物語』の内容が伝わりにくいという声を聞くことが多くなったようです。それはいまひとつ、山村の民俗的世界が喪失しつつあると同時に、そう

した生活から解き放たれつつある今日の精神風景とも深くかかわっていることといえましょう。

そんな折、この『遠野物語』が生まれた里・岩手県遠野市の地元のみなさんが、六年前からはじめられている、「注釈『遠野物語』」の勉強会（遠野常民大学）で、佐藤誠輔さんの「口語訳」のリポートを聞いて、そのわかりやすさと味わい深さに、深い感銘を受けたのでした。

その話を河出書房新社の福島紀幸さんにお伝えしたところから、この試みははじめられたのです。

その意味では、福島さんに感謝せねばなりません。

この『遠野物語』の「口語訳」を果された佐藤誠輔さんは、ながいこと遠野の小学校の教師をされた方で、とくに国語教育の研究者でもあり、すでにその専門の一書を著わされています。

佐藤さんのいわれる「再構成」という方法にもとづいて、柳田国男の原意をそこなわず、今日の読者に伝わりやすい口語体にしたのが本書であります。そして、この「口語訳」を読まれ、「原文」へと読み進まれるいわば「橋渡し」の役割をと願った佐藤さんの仕事は充分果されたと思います。

さらに、「柳田国男研究会」の小田富英さんに詳細な注をつけていただき、地元遠野の版画家笹村栄一さんに挿絵を書いていただいたことが、『遠野物語』のイメージをより豊かにしてくれました。

少年少女から大人まで、多くの方々に読まれることと思っています。

初版序文

この話はすべて、遠野の人佐々木鏡石君[1]から聞きました。

昨年（明治四十二年）の二月ごろから、鏡石君が、夜分、時々訪ねて来ては、この話をしてくれましたので[2]、それを私が筆記しました。鏡石君は話上手ではありませんが、とても誠実な人です。私も彼の話をもとに、一つ一つの言葉を大事にあつかい、私自身が感じたとおりのことを文章にしました。

おそらく遠野郷には、このような種類の物語がまだ、数百件以上もあるものと思われます。私たちはそれらの物語を、もっと数多く聞きたいと心から願うものです。

また、国内の山村で、遠野よりもさらに奥深い所には、無数の山神や山人[3]の伝説があるはずです。どうか、そのような伝説をどんどん語って、都会人を心底からこわがらせ、目ざめさせてください。この「遠野物語」などは、それらからみたら、ほんのさきがけにすぎないのですから。

昨年八月の末、私は遠野郷まで旅をしました。花巻から十余里（約四十五キロメートル）の途中に

は、町場が三か所あるだけで、その他は、ただ青い山と原野だけです。人家の少ないことは、北海道石狩の平野に劣らないと思いました。あるいは、私の通った道が新道で、民家がまだ移り住んでいないためかもしれません。(4)

遠野の城下は、(5)人通りも多く、にぎやかな町でした。さっそく、旅館の主人に馬を借り、ひとりで郊外の村々を巡りました。その馬は、黒い海草で作った厚総をかけていました。虻が多いためです。

猿ヶ石川の両岸は、土が肥えてよく拓けていました。道端には石塔が多く、こんなに多いのはよその国でも見たことがありません。

小高い丘から見渡しますと、早稲はちょうど熟しはじめましたが、晩生はまだ花盛りです。田の水はみな、小川に落ち、猿ヶ石川のゆったりとした流れだけが目だちます。稲の色合は種類によってさまざまあるようです。三つ四つ、あるいは五つもの田が続いて稲の色が同じなのは、ある一族の田圃で、同じ地主のものでしょう。小字より、もっと小さな区域の地名になると、持主でなければだれも知りません。(6)古い土地の売買の証文にだけは記されているものです。

峠を越え附馬牛の谷へ入りますと、早池峰の山が淡くかすんで見えてきます。その形は菅笠のようにも見え、また、かたかなの「へ」の字にも似ています。この附馬牛では、稲の熟すのがさらにおそく、見渡すかぎり緑一色でした。

田圃の細いあぜ道を行きますと、突然、名前も知らない鳥が、ひなを連れて横切りました。ひなの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

色は、黒に白の羽がまじっています。はじめは、小さなにわとりかと思いましたが、溝の草のかげにさっとかくれて、見えなくなったところをみますと、あれはきっと、野鳥に違いありません。

天神の森には祭があり、そこで獅子踊を見ました。ここだけは別世界のように、軽くほこりが立ちこめ、紅い旗や衣裳のわずかなひらめきが、村を埋めつくした緑に映えて、それは鮮やかです。

獅子踊というのは、鹿の舞のことです。鹿の角をつけた面をかぶり、剣を抜きはなった少年五、六人とともに舞うのです。笛の音の高い調子にくらべて、歌声はいかにも低く、側によっても聞きとれません。

『遠野物語』誕生

日は西の山にかたむき、風も出てきました。酔って人を呼ぶ者のだみ声も、なぜかさびしく、女たちは盛んに笑い、子どもはしきりに走り回って、それはにぎやかです。が、ひとり旅のものわびしさを、どうすることもできません。

盂蘭盆に新しい仏のある家は、紅白の旗を高くかかげて、魂を招く風習があります。峠の馬上から、ひとり指

さして、東から西へと確かめますと、この旗の立つ家は、十数か所もありました。

いま、村人の永住の地を去ろうとするこの新しい魂と、かりそめの旅人と、そしてまた、あの悠々たる霊山[7]とを、黄昏はみな、ゆっくりとつつみ込んでしまいました。

遠野郷には八か所の観音堂があり、その像はすべて一木造りだと伝えられています。この日は、観音へのお礼参りの人が多く、丘の上には燈火がチラチラと見えかくれし、伏鐘の音も聞こえてきました。

また、わかれ道（道ちがえ）の草むらの中には、雨風祭のわら人形[8]が残っていました。ちょうどくたびれた人が、あおむけに休んでいるようで、いかにもあわれをさそいます。

以上は、私が遠野郷で持った、とても強い印象です。

さて、このような書物は、現代の流行でないことはわかっています[9]。どれほど印刷が容易だからといって、こんな本を出版し、自分だけの狭い趣味を、他人に押しつけるのは無作法なふるまいだと、おっしゃる方もあるでしょう。しかし、あえて答えます。このような話を聞き、このような場所をじかに見てきて、これを人に語りたがらない人など、はたしているでしょうか。そのような沈黙を好み、また、つつしみ深い人は、少なくとも私の友人の中には見あたりません。

もちろん、九百年前の私どもの先輩「今昔物語」の著者、淡白無邪気な大納言殿なども、ここへ来て聞くだけの値打があります。なぜなら、彼の話はその当時においてさえ、すでに「今は昔」の話

でした。が、これは目の前の出来事です。[10] 神仏を敬いつつしむ気持と、誠実な態度においては、彼に劣るかもしれませんが、人があまり聞いたこともなく、話されたことも、書かれたこともきわめて少ない点では、「今昔物語」にけっして劣らないからです。

まして、近代の「御伽百物語」などの作者にいたっては、その考えがいかにも狭く、そのうえ話の中身が、でたらめでないとは、とても言いきれません。

私は、これらの書物と同じように、並べて考えられ、くらべられるのを内々恥じています。要するに、この「遠野物語」の中身は、現在の事実です。つくり話ではありません。この一つだけをとっても、現代にりっぱに存在する理由があると、私は信じています。

ただ、鏡石君は年わずかに二十四、五歳、私も彼より十歳年長なだけです。二人ともまだ若いのに、今のなすべきことの多い時代に生まれながら、問題の大小も見わけることができないのか。力を注ぐところを間違ってはいないか。と、いう人があったら、どう答えたらよいでしょうか。

また、明神の山のみみずくのように、あまりにも、その耳をとがらして聞き、あまりにも、その目を丸くして驚きすぎるのでは、と、責める人があったら、どう答えましょうか。その時はしかたがありません。この責任だけは私がとることにいたしましょう。

おきなさび飛ばず鳴かざるをちかたの森のふくろふ笑ふらんかも

柳田国男

（1）**佐々木鏡石**　本名を佐々木喜善といい、戸籍上の出生は、明治十九年（一八八六）十月五日、父厚楽長助（栃内村）、母チェの三男として生まれたこととなっていますが、実際は、長助の長男茂太郎とタケの間に生まれました。

一歳の時、父親が病死し、タケの実家である土淵村佐々木万蔵の養孫として育てられることになったのです。喜善は、そこで万蔵の兄にあたる新田乙蔵や辻石谷江婆らの多くの老人達に囲まれ、彼らが語る話の世界を吸収していくのです。

喜善の育った土淵村は、界木峠や和山峠を越えて陸中海岸に出る道筋にあり、駄賃付の村人だけでなく、修験者・山伏や旅芸人・薬売りといった外からの旅人が往き来する空間でした。これらの人々が語り落としていった世間話や噂話が、喜善の体の中に自然に入り込んでいったと考えることができます。

（2）**柳田国男と佐々木喜善の出会い**　農商務省の官僚であった柳田国男は、明治四十一年、仕事で訪れた九州宮崎県の山の中、椎葉村で見聞きしたことに強い衝撃を受けます。日本という国の本質を知るためには、昔から伝わっているもの、昔が残っているものを研究する必要があると考えていた柳田の当時の興味・関心は、天狗とか妖怪とか、昔からの信仰の世界についてでした。椎葉村では、それらの信仰が残っているのではなくて、生活そのものであることに驚くのでした。そうした柳田のところに、以前から龍土会という集まりに来ていた若い文学者水野葉舟が、佐々木喜善を連れて来ることになります。そこで、椎葉で驚いた世界が東北にもあることを知るのでした。それも、椎葉村のような陸の孤島ではなく、交通の要所としての遠野の数々の話に魅了されていきます。この運命の出会いは、明治四十一年十一月四日、柳田国男三十四歳、佐々木喜善二十三歳のことでした。序文では「二月ごろから」となっていますが、柳田は十一月に出会ってすぐに『遠野物語』を書くことを決意し、短期間のうちに喜善からの聞き書きをしていくので、柳田の記憶ちがいといわれています。

柳田と一緒に喜善の話を聞いた水野葉舟も、柳田と違った文章で「怪談話」として発表していくことになります。『遠野物語』と比較してみるのもおもしろいでしょう。

（3）**柳田国男の山人観**　妖怪や天狗などの不思議な世界に興味を抱いていた柳田が、椎葉村や遠野の山の人々の生活や伝承の世界に触れたことで、山人とは、日本に昔から住む先住民族（縄文人）の末裔であると考えるようになっていきます。実際に遠野の地には、遺跡も数多く発掘され、産鉄民族の名残りも多く残っています。しかし、『遠野物語』の話に出てくる山男・山女・異人が、そのような山人かというとそうとも言いきれず、その後、文通する博物学者、南方熊楠からの、里人がなんらかの条件で山に住むようになっただけではないかといった批判に、揺れうごくことになります。

（4）**柳田国男の遠野入り**　明治四十二年（一九〇九年）八月二十二日、柳田は待望の遠野へ旅立ちます。上野発二十三時の夜行列車に乗り、翌二十三日の正午に花巻に着いています。その先は、明治二十八年に開通した猿ヶ石川渓谷沿いの新道を駅馬車に揺られ、土沢・宮守・鱒沢の町場を経て、遠野に着いたのが夜の八時だったと柳田は日記帳に書いているといわれていますが、実際は人力車であったようです。

（5）**遠野の城下**　遠野南部家一万二千石の城下町であった遠野は、北上川流域と三陸海岸を結ぶ交通の要所であり、月に六回たったという市は、「馬三千、人三千」といわれるほどにぎわったといいます。盛岡の南部家に対抗して、町づくりも文化・学問も栄え「小京都」とも呼ばれていました。深い山々に囲まれた盆地の中に、忽然と現われた「煙花の街」遠野に降りた柳田は、喜善から聞いた話の舞台を実感したのです。

（6）**地名への関心**　昭和に入ってから、柳田はそれまでの地名についての論考をまとめた『地名の研究』（昭和八年）という本を出版しますが、その出発点は、明治四十年代のこの頃のことです。後に、「地名とは何であるかと言ふと、要するに二人以上の人の間に共同に使用する符号である」（「地名の話」大正元年）と述べ、「我々の生活と結合」しているといっています。

（7）**悠々たる霊山**　標高一九一四メートルの北上山地の主峰、早池峰山のこと。アイヌ語で、東の陸の脚の意味をもち、山岳信仰の山であり伝説も豊富に残っています。死者の魂が山に帰るという村人の言葉は、以後の柳田の関心となる祖霊信仰や

「魂の行方（ゆくえ）」への布石とも考えられています。

（8）**雨風祭**　『遠野物語』109話参照。全国的に旧暦の五、六月に行なわれる虫送り（害虫を村境に追いやる）の行事と同じで、二百十日の雨風鎮めの祈願行事と合体したものです。

（9）**明治四十年代の文学**　明治四十三年をピークに自然主義文学が隆盛となり、柳田と青春時代を共にした島崎藤村や田山花袋の作品が流行をつくるようになります。花袋や藤村とともに詩をつくることをやめた柳田は、徐々に彼らの小説の世界に異和感を感じていくようにもなるのです。『遠野物語』はそうした柳田が、明治四十年代初頭に世に一石を投じた文学であるともいうことができます。

にもかかわらず、刊行後の『遠野物語』の評価は、「粗野を気取った贅沢（ぜいたく）」「道楽にすぎたようにも思われる」（田山花袋）といった言葉に代表されるような別の角度からのもので、柳田の意図が理解されたとはいうことはできません。

（10）**目の前の出来事**　『遠野物語』119話のうち大半が、だいたい何年前の話であるかがはっきりしているものです。柳田が、このような話の事実性に重きを置いていたことは、喜善から話を聞き原稿を書いていた時期と、刊行した明治四十三年の時差一年を意識して書きなおしていることからもうかがい知ることができます。たとえば、43話の「一昨年の『遠野新聞』」は、稿本では「昨年の『遠野新聞』」ですが、このようになおすのは当然としても、95話のような「四十三四の男」というようなおおまかな数字でさえ、稿本では「四十二三の男」であったのです。このように、きちんと一年を加えていく柳田の細心の注意の裏側を考えていく必要があります。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com